

名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる、本学出身の現代芸術家・森村泰昌に関する文献資料のデータベースの構築・活用方法を検討し、各資料が書かれた当時の文化的背景を考察することが目的である。日本の現代美術を代表する一人として、国際的に活躍を続ける美術作家、森村泰昌関連文献資料の現物にあたることによって、周囲の記事や当時の文化的背景などについても合わせて検討を進め、考察してきた。

O氏の資料収集の方法には特徴があり、森村に関する記事の掲載箇所のみを切り抜くのではなく、資料の本体をまるごと保管するという方針に基づいている。その時同時に掲載されていた他の記事内容や、デザインなどからも時代背景を知ることができ、関連記事だけではわからない様々な情報を読み取ることが可能になる。また、後に編集される図録や作品集などにはほとんど出てこないような作品についても、同時代の記事にはしきりに取り上げられている場合も多く、森村研究にとって貴重な資料体である。

現在、森村泰昌に関するO氏所蔵の文献資料のうち、1980年代から2000年までの雑誌、展覧会図録、パンフレット、新聞記事など（自筆、対談、インタビュー、他筆含む）約3000件について、整理を進めている。作品タイトルや展覧会名でも関連記事が検索できるようにと電子化を目指し、将来的には研究者向けのデジタルアーカイブを構築することを目指す。テーマ演習として大学の授業の中に組み込み、毎週木曜日の午後に集まって、本年度は主に1998年から2000年までのファイルに入った新聞やチラシ類のデータをシートにまとめてきた。また、それと並行してこうした文献資料アーカイブをどのように活用しているかの実例を見学したり意見交換をするために、美術館やギャラリーを訪ね、討論を重ねた。京都国立近代美術館や国立国際美術館のほか、7月10日にはギャラリーすずき、アートスペース虹、ギャラリーモーニング、galerie16、ギャラリー@KCUAを訪れ、@KCUAでは開催中のアピチャップン・ウィーラセタクン個展 -PHOTOPHOBIA-について解説を受けると同時に、関連資料の蓄積や活用について実例を見学した。11月12日はアートコートギャラリー（大阪）にて、大西康明展を見学し、大西氏とギャラリーからお話を伺い、文献の活用ならびにインスタレーションの保存と活用についても意見交換を行った。現代美術はとりわけ、素材が多様化し、展示方法も様々であることから、長期保存についての問題が多く生じている。大西氏の作品も、例えばホットボンドを用いた作品は現場制作で、展示期間が終わると撤去して廃棄されることが多く、長期保存には向かない。ただし、素材や制作方法を工夫することで、移動や再設置も可能となる。近年国内でのインスタレーション形式の発表が続いた大西氏は、今回の大阪ではあえて彫刻作品の展示という形を取り、全ての作品は保存・販売が可能であった。

森村関連資料の活用については、資料の特徴と意義についてテーマ演習にて取り組んだほか、芸術学修士課程の特殊演習でも主題として取り上げ、文献資料を活用しながら、どのように森村を巡る言説が生み出されていったのかを研究した（※）。次年度も引き続き、デジタルアー

カイヴの構築に努めるとともに、その一部の公開や活用について検討し、研究経過の報告会なども視野に入れながら進めてゆきたい。

(※) 田川莉那による研究の中間報告「森村泰昌アーカイブ資料件数」は以下で公開されている。<http://www.kcua.ac.jp/arc/wp/wp-content/uploads/2015/03/morimura01.pdf>